

[単独]「14年前に韓国でいなくなった娘をどうか探してください」

20120209 東亜日報

■ 12回ソウルを訪問した日本人お母さんの絶叫

19歳だった娘は大学入試準備中に
韓国への入国記録だけを残したまま失踪
ソウル各地を回りながらチラシ配布
娘を探すため韓国語も習う
警察に再捜査要請

2日の午後、暗い表情の日本人女性が日本大使館の職員と共にソウルの鍾路警察署に入ってきた。1998年4月に韓国で消えた娘の中村三奈子(33)を15年も探し回っている中村クニ(69)さんであった。

失踪当時19歳であった三奈子さんは予備校への登録を準備していた最中、日本新潟空港を出て韓国の金浦空港へ入国した記録だけを残して突然消えた。捜査に取り組んでいた日本警察は中村さんの名前で予約されたソウル行の大韓航空チケットと実際彼女が該当航空便でソウルに入国した事実を確認した以外は何も韓国からいなくなった娘中村三奈子さんを探している母 中村クニさんの痕跡も探すことができなかった。1999年3日の午後韓国で滞在していたソウル中区のとあるホテルのカフェで娘の顔が入っている失踪チラシをみて悲しみに沈んでいる。三奈子さんを探し始めた韓国警察も大きな成果はなく2005年には未解決事件で終結させた。



三奈子さんが失踪した事実が初めて知らされた年に日本社会も熱い関心を見せた。一般市民たちで構成された「中村三奈子を探す会」が結成されたり、テレビ番組では超能力者を招待し三奈子さんを探す試みもしたりした。一部のメディアは中村氏の北の拉致の可能性まで提起したりもした。しかし、このような関心さえも歳月と共に消えてしまった状態である。

他の人はみな忘れてもお母さんは娘を諦めることはできなかった。三奈子さんはクニさんが早くから夫と死別した後、一人で頑張ってきた末娘だった。小学校の教師であったクニさんは娘を探すために仕事も辞めた。彼女は「大学に必ず行くと言って勉強に熱中していた娘がなぜ突然韓国に発ったのかがいまだ分からない」とし、この日に韓国警察に再捜査をお願いして帰った。

今回が12回目の韓国訪問というクニさんは3日にソウルのとあるホテルで記者と会い、「何もしていないよりは、娘が消えた韓国に来ている方が心が落ち着く」と話した。韓国の空港において空気を吸うと、なぜか娘と同じ空気を吸っているようで心が落ち着くと言う。

彼女はまだ娘との最後の会話を忘れていない。とりわけ愛嬌が良かった娘は、失踪される前日の夜までも教師であったクニさんが学校で使う教材用品も一緒に作った。彼女は「他に服やお金を持っていった痕跡も全くなかった。いまだに娘が消えた理由が見当さえつかない」と話す。

クニさんは韓国に来ている間ソウル各地に娘を探すチラシ 1000 枚を付けた。彼女が韓国語と日本語で直接製作したチラシには娘の最後の姿と共に「どこで何をしているの、元気であることを知らせて。待っているよ。」というクニさんの気もめるメッセージが含まれている。

韓国で滞在する間、寒波と大雪も降ったがクニさんはすべての日程を歩いて行った。道を歩いていて偶然娘とあうかも知れないと思う最後の期待感のためだった。娘がいつ帰ってくるのかもしれないので、娘と共に住んでいた家にいまだ住んでいるというクニさんは1年に一回は韓国に訪問しようと努力している。娘を探すためには韓国語が話せなければと思いい2008年に高麗大学の語学堂で一月間韓国語を学んだりもした。それだけでは誠意が足りないような気がして、娘が失踪した4月7日になると一日中空港で韓国に発つ観光客らにチラシを配っている。



クニさんは「韓国の若い女性たちを見る度にみんな娘のような気がして涙が出る」と話した。

出国を数時間後に控えていた彼女は最後に「本当にどこでどのように失踪当時19歳の中村三奈子さん過ごしているのか便りだけでも知りたい。韓国の皆さんが三奈子を忘れず、続けて関心を持ってほしい」とお願いした。

キム・ジヒョン記者 jhk85@donga.com

<http://news.donga.com/3/all/20120209/43896715/1>